

呪詛と自己犠牲 —キェルケゴール思想における祈りの本質—

中里 巧

序

キェルケゴール思想研究には、様々な方法がある。私が本論文において用いているのは、精神史的手法であり、その目的は、キェルケゴール思想の背景となっている有意味性体系の位相や主要素の構造を手がかりとして、キェルケゴール思想の根幹を解明することである。この作業は、たんなる実証性とは異ならざるを得ない。なぜなら、有意味性体系というのは、価値観や世界観のことなのであるが、そうした価値観や世界観は、拘束力を帯びていて、ここで研究対象となっているキェルケゴール思想のみならず、研究遂行する主体もまた、主体自身が所属している有意味性体系に拘束されるからである。簡潔に云えば、研究対象は研究主体の立ち位置によって、異なって見えるということである。思想や文化という領域は、本質的にこうした事態をつねに帯びているものではないだろうか。また、本論文においてキェルケゴール思想を解明するさい、とりわけ着目しているのは、危機や限界や苦悩といった状況にある個々の主体に対して、きわだった応答をおこなう実存思想としての局面である。こうした局面を考察するさい中核となるのは、主体性概念である。危機や限界や苦悩のただ中にある個々の主体に対して、如何なる仕方や内実であれ、何らかの応答をキェルケゴール思想がおこなうとき、肝要なのはまさに個々の主体がそうした状況にあることないしは過去のそうした体験を顧慮したり自覚したりしていることであり、そうした顧慮や主体的自覚を介して実存思想としてのキェルケゴール思想はもっともあからさまに語りかけるであろう。研究という営みにおいても、こうしたことについて例外ではないし、また無関係であるわけでもなく、研究対象の実存思想としての局面に着目するさい研究主体は、挫折や失敗といった

みずからの危機や限界や苦悩に直面するとき、いったいキェルケゴール思想から如何にどのような応答を引き出すことができるか、内省しながら研究遂行する必要がある。そのようにしてキェルケゴール思想から引き出されてくる応答の質や重みといった内実は、研究主体の主体的－実存的内省と呼応してくるであろう。

1. 罪責観の土俗性

19世紀近代北欧デンマークの思想家セーレン＝キェルケゴールは、ルター派の熱心な信仰者であったと考えられている。熱心な信仰者という意味は、キェルケゴール思想をルター派キリスト教思想のひとつと理解しても間違いではないということである。無論、キェルケゴール思想のすべてがルター派キリスト教思想であるわけではない。けれども、本質的な部分において重複するもしくは同一である、ということである。

そのような仕方ではキェルケゴール思想が本質的にキリスト教的であると理解するのは、一般的であるし広く流布されている。キェルケゴール思想が本質的にキリスト教的であることは、とりわけ彼の罪責観に依拠しているといつてよいであろう。『不安の概念』『死にいたる病』といった彼の著作や父親との関連から、そのキリスト教的な罪責観が思想の中核に存していると考えられてきた。

つまり、キェルケゴール思想が本質的にキリスト教的であるかどうかという論拠は、罪責観がキリスト教的であるということに基づいているわけである。当時のデンマークルター派神学は、ミュンスターに代表される自由主義的－道徳哲学的神学、マーテンセンに代表される思弁的－知性優位の神学、プロアソンに代表される敬虔主義とそのヴァリエーションとしての国内宣教－実践優位の神学、グルントヴィに代表されるナショナリズムとの一体を指向する神学、などであった。

実のところ、当時の神学をこのように分類して、キェルケゴールの罪責観がどれに該当するか作業してみても、奇妙なのは彼の罪責観がどれにも該当しないということである。その主な理由は、彼の罪責観が和解に基づいていないこと、すなわち未だ罪が救済されておらず現在進行形である、という点なのである。

こうした罪責観は、近代デンマーク文芸思潮においてS. S. ブリッカー、P. ミューラー、A. P. ハンセンといった小説家の著作にみられるものである。こうした罪責観の特徴は、北欧神話というよりもなお一層土着的・土俗的な地域に密着した宗教習俗や因習的思考に依拠していることである。そうした宗教習俗や因習的思考は、還元すれば呪詛と呼称することができるのである。

キェルケゴール思想の根幹もしくは少なくともそのひとつが罪責観であることは、間違いない。けれども、彼の罪責観の内実とは土俗的呪詛なのであった。表面的にはキリスト教用語を使って表現しているけれども、その内実はキリスト教的観念とは異なっている。もし、キェルケゴール思想を彼の罪責観からキリスト教的であるというならば、それは間違いであって、土俗的というべきである。

キェルケゴールの父、ミカエル＝ペーダーセン＝キェルケゴールは、1768年12月ユラン半島西部の小村セディングで羊の番をしていた12才のおり、貧しさと辛さから神を幾重にも呪った。この出来事は、キェルケゴール家の秘密であるとともに、キェルケゴール思想生成における決定的要因となった。この出来事は、父ミカエルにおける罪責意識というキリスト教神学カテゴリーによって理解されてきたが、18世紀中頃セディング村とその周辺の宗教習俗のなかに、キリスト教神学や教義学とはまったく異質な土俗的なものがなお生き残っており、少年ミカエルによる呪詛行為は、むしろそうした非キリスト教的・土俗的宗教習俗に起因していたというのが、私の主張である。

セディング村とその周辺のBC5000年以前からAD900年にいたる考古学的遺物・教会建築・牧師日誌から、呪詛の思想的構造が散見される。

2. 父ミカエルの呪詛行為と末子キェルケゴールへの告白

父ミカエルの呪詛の内実を明らかにするために、呪詛の経緯を通時的にまとめてみることにする。

1756/12/12 S. キェルケゴールの父、ミカエル Michael Pedersen Kierkegaard、デンマーク西ユラン地域セディング村の貧しい教会領小作農の家に生まれる。ミカエルの家族は古くから、教会守として教会の建物や墓の管理もしていたと考えられる。ヒースに囲まれ土地は瘦

せ貧困に喘いでいたセディング村一帯は、キリスト教敬虔主義の土地であり、ミカエルの家族が代々守り続けていたセディング教会は、小規模ながら、デンマーク初期キリスト教史時代にまで遡る歴史のある教会である。セディング村とその周辺は、初期農耕石器時代のドルメンから後期鉄器時代のバイキング塚にいたるまで異教の痕跡が、現在なお豊富にみられる。おそらくセディング教会は当時、ヒースに覆われた様々なドルメンや塚に囲まれていたであろう。また、セディング教会の土地それ自体も、キリスト教受容以前は異教の聖域のひとつであったであろう。セディングとその周辺域は、キリスト教敬虔主義に熱心な土地である一方で、北欧神話に連なる土俗的民間伝承も強く生きていた。

- 1765-68? 少年ミカエル、ヘルンフト派の牧師からしばしば信仰のはなしを聞く。
- 1768/12 羊の番をしていた少年ミカエルは、小高い塚に登り、貧困と生活苦から神を呪う。その直後、叔父 N. セディングに招かれ、コペンハーゲンで叔父の商会（詳しく言えば *hosekræmmerbod* : *hosekræmmer* は「毛織物商人」と邦訳されることが多いが、*hose* とは本来、足先から膝までの足にかんする衣類一般を意味し、亜麻・羊毛・革・絹などを原材料とする。18世紀中頃の *hosekræmmer* は、亜麻とりわけ羊毛製の衣類を商うのが仕事であった。地方に商品を買付けに行き、コペンハーゲンの雑貨商に売りつける仲買業が主な仕事であり、裕福な商人階層であった。*hosekræmmer* には、^{どんよく}貪欲さなど人間の暗黒面と密接不可分なイメージが当時つきまとっていた*1) を手伝い始める。地域伝承によれば、ミカエルが神を呪詛した場所は、生家からおよそ 2 km 東に位置するホイエスト=ホイ Højeste høj と呼ばれる鉄器時代の塚であり、この塚は現存している。

*1 例えば、S.S. ブリッカー Steen Steensen Blicher 1782-1848 が 1829 年に書いた小説『毛織物商人』*Hosekræmmeren*。

- 1768/6/18 S. キェルケゴールの母、A. セーアンスダーター＝ルン Ane Sørensdatter Lund（ミカエルの遠縁にあたる）中部ユラン地域ブラントルンビューに生まれる。
- 1838/5/5? 父ミカエルは、自らの死の迫っているにもかかわらず、セーレンが放蕩生活を続けているのを哀しみ、自らの秘密をセーレンに告白する。その内容は、少年時代貧困ゆえに神を呪詛した結果、ミカエルが神に呪詛し返され、毛織物商人として金持ちとなったこと・初婚の妻の死・喪服中に遠縁のセーアンスダーター＝ルンにミカエルの子が宿ったため再婚したこと・セーレンの兄弟姉妹が悉く死んでいくこと・キェルケゴール家全員が神の呪詛を受けていること・長男ペーターと末子セーレンは、神に生け贄として捧げるために宗教教育を受けていたこと・キェルケゴール家の希望は二人に託されていること・二人が拒めば、キェルケゴール家全員が地獄に墮ちること、などであった。父ミカエルからこうした告白を聞いて、S. キェルケゴールは、「大地震」*2のごときショックを受けて、改心する。

3. キェルケゴール家の秘密

キェルケゴール家の必密については、1877年長男ペーターが、キェルケゴール遺稿集第1版編纂者バーフォーズ*3の質問に、直接答えた言葉から明らかになった。

バーフォーズは、キェルケゴールが生前書き残した或る日誌 *Pap.IIA802-807* のなかに、「大地震」というタイトルのついた記述を見つけた。ペーターは、父ミカエルが少年時代神を呪詛したことに起因する一連のキェルケゴール家にまつわる神からの祟りと罰について、キェルケゴールが父ミカエルから告白された内容であると泣きながら、「大地震」記述のある日誌についてバーフォ

*2 *Pap.IIA802-807*.

*3 p.13ff. in *Til Minde om Biskop Peter Christian Kierkegaard og hans Jordefærd*, af H.P. Barfod, Karl Schönbergs Forlag, København, 1888.

ズに説明したのであった。父から告白されたのがいつであったか諸説あるが、私自身は1838年5月5日と考えている。キェルケゴールが、キェルケゴール家の呪詛を払うため、幼少の頃から父によって宗教教育をほどこされ、神への生け贄として生涯を捧げるべく父によって生育されたこと、およびそのことをキェルケゴール自身が信じて疑わなかったことは、キェルケゴールの日誌研究その他から明らかである。また、ひとたびはレギーネ＝オルセンと婚約したキェルケゴールが、しばらくして一方的に婚約を破棄したのも、自らが神への生け贄であるという理解のゆえであったし、そもそも、キェルケゴールのきわめて多産的著作活動それ自体が、神への生け贄としての^{わざ}業であり使命であった。したがって、キェルケゴール思想の発端には、父ミカエルの「呪詛」観が存するのであり、それが父ミカエルのみならず、キェルケゴール家全体に及んで信じられていたと十分に推測される事実が存するのであって、こうした「呪詛」観がキェルケゴール思想とも本質的に連関しているという推測が、成り立つわけである。キリスト教という有意味性体系が圧倒的に優勢な欧米のキェルケゴール研究においては、この「呪詛」観は、キリスト教における「罪」観念で説明されてきているが、はたして、当時のデンマークルター派国教会の教義のみを以てして、こうした「呪詛」観が説明し尽くせるのかどうか、私自身は疑念を持っている。むしろ、父ミカエルが少年時代まで暮らしていた小村セディングー帯における当時の信仰生活は、北欧神話伝承に連なるような土俗的内容と濃厚に融合したものであったのではなかったか、と考えたい。いずれにせよ、キェルケゴール家の秘密と表現される事柄は、キェルケゴール思想と本質的に連関する重要な事象である。

4. 父ミカエルの呪詛行為をめぐる有意味性体系の諸要素

以下に、父ミカエルの呪詛行為をめぐる有意味性体系の諸要素を箇条書き的に列挙してみる。

- (1) セディング村とその周辺の地理的位置

Det levende Danmarkskort2001 などの地図を参照。

- (2) 考古学的背景

Dejbjerg Hede, Skjern Egved Dejbjerg Jernalder Museum (Dejbjerg Mose)

- lange dyse / rund dyse / jagtestuen など、前期石器時代から後期鉄器時代まで継続的にドルメン・墳墓がみられる
- 鉄器時代の大地母神の馬車 Dejberg Gudinden Vogn 出土

Rækker Mølle	Rækker Mølle Gård (S.Kierkegaard Minde Haal)
	• キェルケゴール生家資料
Sædding Kirke	• 初期教会の形態をとどめる（ゲルマン＝ケルト装飾紋様・洗礼盤）
	• 古代からの聖域であった可能性(Jelling Kirke とシチュエーションが似ている)
Sædding 周辺	19世紀前半までヒースに囲まれ、塚（古墳）が散在した。
Højstehøj	• 前期鉄器時代の塚（古墳）。

(3) 民俗学的背景

18世紀から19世紀にかけての地域伝承

- 参考文献

Peder Palladius's Visitatsbog, udgivet af A.C.L.Heiberg, Kjøbenhavn, 1867.

Slægters gang i Sædding sogn, ved Maren og Anders Steengaard, Sædding, 1998.

(4) 神話的背景

- ミカエルの信じた呪詛構造は、呪い＝呪われる関係である（一種の贈与構造・自滅的－救済のない性格）

5. キェルケゴール思想における祈りの本質

キェルケゴールにおける罪責観は、表面的にはキリスト教用語を使って表現しているけれども、その内実はキリスト教的観念とは異なっている。もし、キェルケゴール思想を彼の罪責観からキリスト教的であるというならば、それは間違いであって、むしろ土俗的というべきであろう。スカンディナヴィア固有の

思想や精神史的事象を、キリスト教的枠組みから強引にキリスト教に優位な仕方
方で再解釈するという営みは、しばしば目につくことである。例えば、カール
大帝によるキリスト教と政治的版図の侵略的拡大に抵抗したバイキングの活動
が、むしろキリスト教的世界観では逆に理解されて、バイキングがその野蛮さ
ゆえに一方的にキリスト教圏に侵略をおこなったというふうに事象の変質が起
こるのである。

キェルケゴール思想におけるこうした罪責観は、キェルケゴール思想におけ
る祈りの構造に、当然のことながら反映している。その構造は、呪詛と自己犠
牲という概念を導入することによって垣間見ることができよう。呪詛という概
念の特質は贈与性にある。それは、すなわち、相手に何らかのものを付与すれば、
その相手から再び何らかのものを付与し返されるという贈与性である。神を呪
えば神から呪い返されるという構造である。実際、キェルケゴールの父ミカエ
ルおよびその秘密を知ったキェルケゴール家の人々が、怯えかつ信じていた罪
責意識は、キェルケゴール家という血脈に対する神からの呪い返しという仕方
でのいわば神罰なのであった。ミカエルの長男ペーターと末子セーアン＝キェ
ルケゴールは二人とも、この秘密を知っていた。ペーターとセーアンそれぞれ
の思想の抜本的相違性については、ペーターの著作集に所載されているセーア
ンに対する思想批判が参考になる。神罰に対してペーターは、キリスト教の啓
蒙、言い換えれば、デンマーク社会におけるキリスト教の一般化という仕方
で対応した。セーアンは、奇妙であり過激でもあるがその生涯において、しだい
に自己犠牲という観念を深化させて、自らの実人生の営みとイエスの受難を重
ね合わせる思想を構築していった。自己犠牲という理解は例えば、タキトゥー
スの『ゲルマニア』に記述されている祭司の営みやサガ文学における英雄の行
動など、古代中世スカンディナヴィア社会における特徴的精神性である。キェ
ルケゴール思想における祈りの本質は、こうした古代中世スカンディナヴィア
社会における特徴的精神性の継承に根拠があり、内面の美を尊重する一種の美
意識を衣としているということができよう。

6. 古代スカンディナヴィア文学における内面の美

カナダに生まれ大学卒業後、イギリスの大学で教鞭を執った E.V. ゴードン Eric Valentine Gordon (1896-1938) は文献学者であり、古代スカンディナヴィア語とりわけアイスランド語にかんする著名かつ実際にきわめて優れた入門書『古ノルド語入門』 *An Introduction to Old Norse* を書いてオックスフォード大学出版局から1927年に公刊した。この著作は、たびたび版を重ねて現在にいたるまで刊行され続けている。この著作のなかでゴードンは、サガ文学の虚構性について否定的であり、次のように述べている。

「アイスランドのサガの記録者たちは、現代小説において卑近におこなわれる心理分析的手法を英雄に対して用いることなく、英雄の性格を読者に伝えるのがつねである。記録者たちは、分析ではなく総合によって、英雄の行動を開陳することによって、英雄の性格を劇的に示す。おそらくアイスランドのサガ文学ほど、丹念に英雄の行動を吟味考察し評価する文学は、他にないだろう。英雄の行動に対するその評価の基本は、倫理規範 moral ではなくて、美意識 aesthetic である。アイスランドのサガ文学ほど、人間の行動に対して美的理解 sense of the beauty を示す文学は、他にない。実際、アイスランド散文作品の記録者たちは、スノリを除いて、行動と性格以外の美には注意を払わないように思える。英雄は男性も女性も自ら、行動に対して美的見解を有していた。こうした美的見解こそが、英雄たちを導く標識であった。なぜなら、英雄たちは、倫理性 morality については、きわめて未発達な観念しか有していかなかったからであり、宗教的離反 sin についてはまったく観念を有していなかったからである」*4。

行動に対する美意識とは、勇敢・誉れ・誇りといったいわば内面の美であって、こうした内面の美をきわめて強くまた純粹に保持しているのが英雄の性格であって、内面の美としての英雄の性格が端的に顕在化するのが、英雄の典型的行動ないしは典型的生き様なのである。ゴードンはさらに続けて、次のように述べている。

*4 p.xxxiv-xxxv in *An Introduction to Old Norse*, by E.V.Gordon, second edition revised by A.R.Taylor, Oxford, at the Clarendon Press, 1986.

「荒々しい時代に人々が直面した人生における主要な悪 evil は、剣による死であった。これが、古代スカンディナヴィア人記録者たちがつねに確執 feuds や争い battles を英雄物語の背景として取り上げる理由である。確執のゆえに争う英雄たちの内面的原動力については、たびたび誤解されてきた。なぜなら多くの批評家は、争いや殺害それ自体を目的とおこなう喜びが英雄たちの性格に内属していると考えてきたからである。しかし実際はまったく逆であって、英雄たちは、そうした喜びのうちに最大の悪 greatest evil が存していることに気づいていた。そして、この最大の悪こそが、最も英雄らしい力を発動させて善に向かうように、英雄たちに要求するのである。記録者たちの醍醐味は、まさにそうした力を有する者を描くことにあった。

大概のサガは悲劇 tragedies である。なぜなら、善き絶命 good death が英雄の性格上最大の勝利なのであって、敗北と絶命のうちにのみ、あらゆる英雄の抵抗する力が顕現するからである。実際に、大概の英雄文学は悲劇的であり、大概の真の悲劇は英雄的である。破局の断末魔においてなお英雄が屈服していないという勝利が印されていることこそが、悲劇の本質なのである。如何に悪が打破されようと、たとえ悪が勝利しようと、悲劇もまた人生における悪の一つの様態である…

…英雄を最大限表現するために、圧倒的劣勢であっても断固として抵抗し続けるという状況が、英雄文学の典型的情景となった。例えば、グンナル Gunnar の防戦やニヤル Njal のひるむことのない死の受容、を挙げることができる。こうした状況は、宗教的信念の内部においても見いだすことができる。神々は、最後には悪の諸力によって神々自身が打ちのめされるであろうことを、知っていたのであった。しかし神々は、最後の瞬間まで抵抗し続けるべく覚悟していた。異教時代の宗教心をもった各々の人間は、自分が絶望的理由によって生存している exist、と信じていた。なぜなら、神々は、最後の闘争において神々を助勢させるために、あらゆる英雄を地上から連れ去るからである」*⁵。

ゴードンに拠れば、殺戮や暴力が悪であり、殺戮や暴力に帰結する確執や

*⁵ p.xxxi-xxxii in *An Introduction to Old Norse*, by E.V.Gordon, second editon revised by A.R.Taylor.

争いを欲する衝動はとりわけ最大の悪であることを、サガ時代の英雄は理解していた。英雄の性格は善を希求し、最大の悪と対峙するとき、力を極限まで発動させて、あくまでも善を希求し続ける。こうした英雄の性格は、戦いにおける外面的敗北と身体的絶命においてさえ、内面的には最大の悪に対してなお屈服せず抵抗し続けるがゆえに、そうした敗北と絶命においてこそ最も鮮明に、英雄の英雄らしさが現出する。敗北と絶命の断末魔においてなお英雄が最大の悪に対して屈服せず抵抗し続けるという行動こそが、サガ時代における究極の美であり、名誉であって、すなわち外面的には敗北であっても、内面的には勝利なのである。このように外面的敗北においてこそ内面的に勝利するゆえに、サガ時代の英雄の本質は悲劇に存している。

究極の悪とは、神々の仇敵である巨人族やロキではなく、世界全体の絶滅を必然とする運命であろう。この運命を十分自覚しつつもあえてあがって、死に果てる最後の一瞬まで生き抜くべく戦い続けること、これこそが神々の名誉であり、英雄にとっては究極の名誉であり、至高善なのである。

7. ケルケゴールにおける祈りの本質

精神的観点から考察するかぎり、ケルケゴール思想という有意味性体系の中核に位置する祈りという宗教行為の主要素は、呪詛・自己犠牲・内面の美としての美意識などである。問題は、これら主要素の構造連関の内実であり、その内実を明らかにすることである。

呪詛は、負の連鎖を増幅させる贈与構造を内包している。北欧北方精神史に特徴的にみられる血の復讐もまた、この負の連鎖を増幅させる贈与構造を内包している概念であり、とりわけ古代中世スカンディナヴィア人の世界観の根本気分であるラグナロクの気分、すなわち、不可避的に世界の破滅に導く運命に対する予感としての不安や絶望を、呪詛や血の復讐はともに抱えている。ケルケゴールの日記においてもとりわけ、その死の年である1855年9月25日の最終部分において、そうした根本気分は、もっとも激烈に表れている*⁶。

自己犠牲は、不可避的に世界の破滅に導く運命としての究極の悪の働きに対してあがう意志の発動による英雄的行為であり、外面的には究極の悪の働き

としての破滅への運命に屈して死に至るのであるが、内面的には、肉体の死を以てしてもどこまでも屈服することなく破滅への運命にあらがい続けるのであり、そうした内面性が、誇り・誉れ・名誉といった美意識として表れるのである。呪詛が負の無限の連続性を帯びているのに対して、自己犠牲は、破滅への運命にあらがう意志の発動、言い換えれば、破滅への運命によってさえ内面的には拘束されない自由をともなっている。また、呪詛が自己自身の罪性ないしは有限性に起因しているのに対して、自己犠牲は、何らかの仕方では他者の抱える負の運命を他者に代わって我がものとして背負い込むという、他者の負の運命を自己有化するという対他性ないしは他者性を帯びている。こうした自己有化は、あくまでも自由の発露としての行為であって、徹底した甘受であり、他者に対して責任を一切問わずまた求めもしないという、内面の美が伴っている。

受難のイエスに象徴される宗教性 B としての逆説的実存様態は、一切の合理的認識も一切の美的把握も不可能な様態としてキェルケゴールは、『キリスト教の修練』において語っているが、社会的には組織化されない戦う教会の構成要員である個々の信仰者が、ひたすら信仰においてのみ理解し合うものであるとも語っている。ところで、こうした戦う教会ないし戦士としての信仰者という概念は、原始キリスト教会において一般的であった「キリストの兵隊」という観念と思想潮流を同じくするものであって、決して特異なものではない*7。

宗教性 B としての逆説的実存様態が合理的認識や美的把握を受け付けないというキェルケゴールの主張は、逆説的実存様態の深みを尊重し表層的理解の不誠実を警告するためのものであって、逆説的実存様態に対する理解について拒否したり諦めたりすることを促すための主張ではない。

『死に至る病』冒頭の「関係としての自己」の定義や日誌にある「アルキメ

*6 *Pap. XI 2A 439* (p. 439f. in *Søren Kierkegaards Papirer XI 2*, Anden forøgede Udgave ved Niels Thulstrup, Udgivet af Det danske Sprog- og Litteraturselskab og Søren Kierkegaard Selskabet, Gyldendal, København, 1969); p. 649ff. in *Søren Kierkegaard Papers and Journals, A Selection*, Penguin Classics, translated with introduction and notes by Alstair Hannay, Penguin Books, London, 1996.

*7 *A History of Pagan Europe*, by Prudence Johe and Nigel Pennick, Routledge, 1995 : p. 1)

デスの支点」といった言葉は、祈りの構造や特徴を示したものであると解釈できるが、こうした定義や言葉をとおして明らかとなるキェルケゴール思想における祈りの特性は、祈りが狭義の言葉による祈禱を示すというよりも、むしろ広義の実存体制を示しており、さらに云えば、そうした広義の実存体制にこそ祈りの本質が存しているということである。こうした実存体制抜きには、祈りは成立しないのであり、実存体制すなわち精神の構えにこそ、祈りの核心はある。ただし、イエス像や聖書の聖句など、何らかの介在ないし象徴によって、そうした実存体制や精神の構えが触発されたり惹起されたりすることは、ありうる。そして、実存体制や精神の構えを触発したり惹起したりする重要な役割を果たすのが、美意識ではないかと思う。キェルケゴールの用語法においては、この美意識は気分と呼ばれており、キェルケゴール思想においては不安や絶望などいわば否定的情緒が強調されているように一般には理解されているが、精神的観点から云えば、そうした不安や絶望などの否定的情緒は、不可避的に破滅に導く運命に対する情緒であって、こうした運命にあらがうもう一つの情緒が存在しており、それがサガ文学においては誇り・誉れであって、キェルケゴール思想のばあいにも、同種の情緒が潜在していると推測できる。それは、例えばイエスに対する憧憬や思慕ないしは崇高性に対する清純さ・感謝の念といった情緒であり、これらも気分ではないかと思われるのである。要するに、気分ないし情緒にも、弁証法的二項性が存在しており、情緒ないし気分のこの弁証法的二項性によって実存体制が動態化するものであり、二つの情緒ないし気分のうち、イエスに対する憧憬や思慕などの情緒ないし気分の方が、つねに優位するという根本条件によってはじめて動態化するのではないかと思うのである。

この動態化を、キェルケゴールの用語法に置き換えれば、差し当たって運動が思い浮かぶが、運動といっても慣性的運動ではなくて、慣性的運動そのものを触発して生起させるような精神的起爆剤のようなものであって、感動や感激であり、キェルケゴールが情念や激情と呼んでいる、いわば火山噴火のような精神の噴出である。しかし重要なことは、精神のこうした噴出は、不可避的に否定的情緒によって断続するということである。むしろ、このような否定的情

緒による断続によってこそ、精神の噴出するいわば溜めが生じるのである。

呪詛に起因する否定的情緒と、否定的情緒による溜めを破って肯定的情緒が噴出すること、これが、瞬間と呼ばれる事象ではないだろうか。そして、この瞬間において噴出するイエスに対する憧憬や思慕ないしは崇高性に対する清純さ・感謝の念といった情緒は、愛とも言い換えることが可能ではないだろうか。キェルケゴールはイエスに向けて、いわばサガ文学における英雄像を投影しているのではないか。当然のことながら、キェルケゴール自身が自覚的にそうした英雄像を投影しているわけでは決してないけれども、キェルケゴール思想における宗教性 B という実存様態としてのイエスに、そうした英雄像が投影されているとみなすことによって、受難のイエスがいったいなぜ、キェルケゴール思想において強調されるのか、また、キェルケゴール思想におけるイエス像が如何に魅力をもつものであるかなどを理解するのが、より容易になるのではないだろうか。